

ました。ニューカマーが多い外国人集住地域では、目の前の彼らの生活を守るべく、それぞれの状況や課題に対応するために、多くの関係機関が協力しながら支援構築してきた背景があります。言い換えれば、それらのサポートは、ニューカマーの増加に伴い外国人集住地域を中心にノウハウが蓄積されてきたと言えるでしょう。生活支援のみならず、帯同する家族や子どもへの支援へと広がりを見せ、教育に関しても手厚い支援を構築する府県も見られています。筆者が長年フィールド調査を行ってきた大阪府や、最も外国人住民の数が多く東京都、そしてニューカマー受け入れに歴史のある神奈川県との取り組みは、日本の中でも比較的早期に先進的な取り組みを行ってきたことが明らかになっています。

それら集住地域における外国人支援の蓄積は、その他の例えば外国人散在地域で直面する課題にそのまま当てはめることは困難である場合があります。つまり、移民政策が不在である日本において、これまでは、各都道府県の小中学校それぞれにおける努力や、NPOやボランティアなどが主体となり、外国人の子どものサポートが行われてきました。それぞれが必要だと思う支援を個別に行っており、関係する団体・組織でも、他でどんな課題があり、支援がなされているかを共有することが難しかったとも言えます。

その中において、宇都宮大学HANDSプロジェクトは、国際化する北関東を対象とした外国人児童生徒のための地域連携が目指されており、外国人児童生徒教育に関する様々な取り組みを10数年にわたり取り組んできました。『宇都宮大学HANDSプロジェクト 3年間の歩み』(2013)にもあるように、「様々な異なる立場に立つ者同士が、共通の目標を見出そうとしながら、直面する課題の解決に向けて討議と活動を進めていく」プラットフォームが、宇都宮大学という知と人材資源が集まる場に設定されています。そのことが、これまでそれぞれNPOや教育機関ができる範囲で支援を行ってきた狭い枠組みから、それらを越えた協働に繋がっていると思います。この有機的な連携が、宇都宮大学HANDSプロジェクトの外国人児童生徒教育支援活動に厚みと多様性をもたらしていると考えられます。

場の意義を考える際の3つの視点:サンドラ・ウォルマン「3つの資源」

これまで10年にもわたり宇都宮大学を拠点として継続されてきたHANDSプロジェクトの取り組みの意義について考察を加えてみたいと思います。その際に、サンドラ・ウォルマン(1996)の3つの資源についての考え方を援用したいと考えました。

『家庭の三つの資源』は、ロンドンのインナーシティで暮らす8つの家族を対象に人類学者が調査を行った研究書です。ウォルマンは、家族がうまくやっていくためには、「土地」「労働力」「資本」といった「構造的資源」の多寡だけではなく、「時間」「情報」「アイデンティティ」の3つからなる「編成的資源」が重要であることを伝えています。

ニューカマーの子どもたちの教育問題について教育社会的視点からフィールド調査を行った志水・清水(2001)は、外国人家族から継承される資源について、ウォルマンの理論を援用しています。清水は、ニューカマー生徒教育について、「時間」を長期的な視野に立つ教育支援、「情報」を日本社会やエスニック・コミュニティのネットワーク、「アイデンティティ」を家族間関係やエスニック・アイデンティティを意味するものとして定義しています(志水・清水2001,p.137)。そして、これらの編成的資源は、地域活動や学校教育を通じて獲得することは容易ではないとする一方で、エスニシティなるものを無徴化しようとする日本の学校文化に対抗するための積極的な資源であると同定しています。

この考えに当てはめて、宇都宮大学HANDSプロジェクトのこれまでの取り組みをウォルマンの「編成的資源論」から眺めてみると、次のように整理することができると思います。ここでいう「時間」は、長期展望で栃木県を中心とする北関東の外国人教育について積み上げ式の支援／研究を行うことを意味します。そして「情報」は外国人生徒の学習に関する課題や困難など共有する研究者、実践者、学生が存在や調査結果の蓄積を指し、「アイデンティティ」に関しては、外国人生徒の教育を課題視し、公正な教育のあり方・支援の必要性を考え支援する人の集まりであること、すなわち外国人生徒側から見れば、外国人として差別なく教育が受けられる存在であると肯定する集団であることを指していると言えるでしょう。

以上のように、「資源」とみなすことのできる場が10年にもわたって設定されてきたことが分かります。もちろん、栃木県内及び北関東の外国人生徒にとって、宇都宮大学HANDSプロジェクトのこれまでの活動が直接的な資源となり得ているのかについては、これから詳細な検証が行われることが期待されます。しかしながら、長期展望を持ち、様々な関係者と情報共有を行い、また外国人生徒の教育について考えてきたHANDSプロジェクトが及ぼしてきた影響は大きいと言えます。繰り返しになりますが、少なくとも、多くの関係機関やその関係者、大学生らとともに、外国人生徒教育につい

て共通の目標のもと議論をする場を宇都宮大学の中に持つことができていることは大きな「資源」であると考えます。

宇都宮大学HANDSプロジェクトの今後への期待

これまで考えてきたように、宇都宮大学HANDSプロジェクトの意義は大きいと理解することができます。最後に、ここでは宇都宮大学HANDSプロジェクトの今後について、私からの期待を述べたいと思います。

2018年末に出入国管理及び難民認定法が改正され、外国人労働者を受け入れるための新しい在留資格である「特定技能」が創設されました。この変更により、今後ますます家族を帯同する外国人労働者の増加が見込まれ、共に日本社会を築いていくこととなります。生活者としての外国人家族支援、そして子どもの教育支援はますます重要になると予想されます。宇都宮大学HANDSプロジェクトの功績について考える時、外国人生徒教育支援について大学が中心となり活動が担われてきたということが大きいと考えています。大学は研究教育の場であると同時に、地域への開放性や社会課題解決に向けた協働の場でもあると考えています。北関東の各県における様々な課題や支援のあり方について、多くの関係者がこれまで話し合いを重ね、多くの成果を挙げてきています。10年間積み上げてきた宇都宮大学のリソースと「場」を更なる10年に向けて充実させて欲しいと願っています。

さらに、宇都宮大学HANDSプロジェクトのこれまでの大きな役割の一つに、人材育成があると考えます。多文化社会における課題に向き合い解決することの大切さや、アイデアを出し、行動する重要性について、授業の一貫として経験できることに大きな意味があると思います。冒頭で述べたように、初めてフォーラムに参加した際、運営を担っていた大学生たちが生き生きと活動をしている様子を目の当たりにしました。中には自らが外国につながる背景を有している学生も見受けられ、マジョリティとされる学生も彼らの視点から学ぶことで、社会課題を自分ごととして捉えることができたのではないかと思います。宇都宮大学HANDSプロジェクトの中で学んだ大学生たちが、外国につながる子どもが自分が望むキャリアを形成できるような、多文化に開かれた日本社会を築いていくことに寄与してくれるものと信じています。

最後に、宇都宮大学HANDSプロジェクトが今後も引き続き、北関東の外国人生徒教育を考える重要な主体として多くの関係者と有機的連携しながら、進められていくことを一研究者、市民として期待しています。

参考文献

- ・サンドラ・ウォルマン著・福井正子訳『家庭の三つの資源—時間・情報・アイデンティティ』河出書房新社、1991年。
- ・志水宏吉・清水睦美『ニューカマーと教育—学校文化とエスニシティの葛藤をめぐる』明石書店、2001年。

国際交流協会から見た日本語教育について

公益財団法人栃木県国際交流協会 元事務局長 小林 忠教

私は平成26年3月に県職員を退職し、平成27年4月から公益財団法人栃木県国際交流協会に勤務し、令和2年3月に退職しました。この5年間、県内の外国人住民の動向を通して、日本人も外国人とともに住みよい社会を目指す「多文化共生の社会づくり」事業に携わってきました。その中で田巻松雄教授と繋がりを持ち宇都宮大学の多文化公共圏センターのHANDSプロジェクトの存在を知りました。そこで、今回お話をいただきましたので、私からは国際交流協会の事業を通して、外国人住民への日本語教育の現状、課題等について述べたいと思います。

我が国は、少子高齢社会の中であって、これまでも日系人の受入や将来を見据えた外国人材の活用など様々な施策が展開されています。昨年4月からは、労働力の不足している14業種について、外国人材を雇用できるよう新たな在留資格「特定技能」を創設して受入を円滑に進めようとしています。また、昨年6月に決定された「日本語教育推進法」により、国や地方公共団体の責務を示し、外国籍の子ども達や外国人住民への日本語教育の充実を図ることとしています。ちなみに昨年末の本県の外国人住民数は118ヶ国・地域 42,835人で7年連続して増加し過去最多です。今回初めてベトナム人が中国を抜いて1位で7千人を超えています。真岡市、小山市が人口比率で4%を超えています。こうした背景を踏まえて、私見も交えて述べさせていただきます。

一つは、「日本語教育の充実」です。外国人材は将来母国に帰る方もいますが、定住、永住していく傾向にあります。特に子ども達は、日本での生活が長くなればなるほど、母国での接点は薄れていき帰る拠点がなくなっていくます。そうした子ども達が義務・高校教育を受けられずに大人になる時、社会生活を送るうえで大きな障害となってきます。多文化公共圏

センターのHANDSプロジェクトの多言語進学ガイダンスは、まさにその危機感に沿って生まれたのではないかと思います。そして、外国人が日本で暮らす上で、ある程度の日本語力は必要不可欠であり、外国人が今後も増加していく趨勢の中では日本語教育の体制整備は一刻も早い課題だと感じています。日本語教育推進法の成立によって県として日本語教育体制を整備し提供していくことが、将来の本県にとっても大きな力になると思っています。また、災害時の情報伝達は生死に関わる大きな問題であり、更に労働災害を少なくしていくためにも、その根本となる日本語の情報伝達は必要不可欠であると考えます。今後、日本語教育は国、県の体制整備が順次行われ、そこに携わる関係者も増加していくことにより充実していくことが予想されますが、あらゆる地域の中に浸透していくにはまだまだ時間を要すると思います。

二つ目として、私も関わってきた、「やさしい日本語」の存在があります。この「やさしい日本語」は阪神淡路大震災後に生まれ25年が経ちますが、まだまだ普及していないのが現状です。被災者等の割合が外国人の方が高かったのは、災害に関する日本語が理解できなかったことも要因の一つではないかとの視点から研究が始まりましたが、災害時だけでなくコミュニケーションの手段としても有効であり普及していきましょう、ということです。ゆっくり、はっきり話す、短く区切って話す、尊敬語や熟語など難しい言葉はなるべく使わない、文章は短くし、ふりがなをふるなどですが、要は相手の日本語の理解力にあわせて言葉を言い換えていくことです。日本人、外国人双方に「やさしい日本語」の存在を知ってもらうために更に普及啓発していくことが必要だと感じています。

三つ目は、地域活性化のための多文化共生の視点について触れます。定住化、永住している外国人が増加している中、外国人とどう関わっていくかは地域の将来にとっても大きなことだと思います。伝統的な祭りや地域活動等に対し、外国人にも積極的に関わられる状況を醸成し、例えば商店街の活性化と一緒に活動できる人材として参画してもらい、これまでの取組を見つめ直すきっかけとします。外国人住民も地域の一員としての理解や愛着が増し、そうした活動が様々な地域で現れることがともに暮らす上で大きな力になると思います。こうした外国人が多数現れるようにするためにも、地域の中で日本語を学べる機会や日本語教育の充実が前提になります。と同時に、現在も各地域でボランティアの方々が活動している「日本語教室」も大きな存在だと感じています。外国人の日本語の学びの場であると同時に交流の場、やすらぎの場でもあります。ボランティアの方々の確保など存続には課題も多いようですが、この日本語教室が外国人と地域との橋渡し役を果たす一面もあると思っています。

最後に、国際業務から離れてはいますが、HANDSプロジェクトの今後の活躍を祈念しています。

HANDSプロジェクトへの期待

下野新聞社教育文化事業部 小笠原 一夫

HANDAプロジェクトの活動が、10年の節目を迎えられたとのことで、関係者の皆様方のご苦労に対し敬意を表したいと思います。

下野新聞社では2013年から「栃木県高等学校進学フェア」という進学相談会を開催しています。高校進学を目指す生徒や保護者などが来場し、高校ごとに設けたブースにおいて、高校の先生から学校の様子などを聞いたり、入試に関する情報を得たりしており、年々来場者も多くなり盛況になってきています。

高校進学を目指す生徒、保護者にとって、高校の特色や入試情報などを収集することが大切なのは言うまでもありません。高校進学はその子の将来を左右する一大イベントであり、納得のいくまで情報を収集して悔いのない進路選択をしてほしいと思っています。そんな子どもたちのお役にたてればと「高等学校進学フェア」を開催しているのですが、訪れるのは、ほとんどが日本人の生徒と保護者達です。外国人の生徒、保護者の姿はほとんどありません。

今や栃木県では、外国人労働者数が年々増加傾向にあり、当然の事ながら日本語を母語としない児童生徒が増えていきます。2019年度の栃木県内の外国人児童生徒数は、県教委の調べによると小学校で1175人、中学校で505人の計1678人上っているそうです。

日本語を母語としない外国人生徒にとって、高校進学のシステムを理解し、入学試験を受け高校に進むことは容易ではないでしょう。そんな外国人生徒や保護者にも、この「高等学校進学フェア」が必要な情報をご提供できてきたかという、お恥ずかしい限りです。

HANDSプロジェクトは、日本語を母語としない児童生徒のために、通訳学生ボランティアを派遣したり、日本の教育制度、栃木県の高校の特色、入学試験などの情報提供を目的に「多言語による高校進学ガイダンス」などを主な事業として

活動されています。

そんなHANDSの取り組みを私が知ったのは、2017年に宇都宮大学のキャンパス内で行われた「多言語による高校進学ガイダンス」を見学させていただいた時のことです。HANDSプロジェクトの宇都宮大学国際学部の田巻松雄教授から、下野新聞主催の「高等学校進学フェア」と何か交流ができないかとのお誘いをいただき、HANDSの取り組みを拝見させていただきました。そこでは、母国語ごとにテーブルが設けられており、外国人の生徒・保護者、通訳ボランティアの方々の熱心な様子が見て取れました。ぜひ下野新聞の「高等学校進学フェア」でもこのHANDSの取り組みを活かして頂けないかとの思いで田巻先生にご相談させていただき、その結果2018年度から「多言語による高校進学ガイダンス」を「高等学校進学フェア」の会場で開催していただくことになりました。

最初のガイダンスでは、告知不足もあってか参加者が少なかったのですが、その代り相談者の一人に時間をかけてじっくり状況を聞くことができたようです。その生徒は日本語がまったくわからず来日し、日本語での試験を受けても合格することは到底不可能に思えたため、特別措置受験を説明し、その後学生ボランティア2名を派遣して合格するまで支援をされたそうです。その外国人生徒にとってHANDSとの出会いがその生徒の人生を大きく変えたのではないのでしょうか。

田巻先生の著書『ある外国人の日本での20年～外国人児童生徒から不法滞在者へ～』を拝読しました。

10歳で来日した真面目な外国人の児童が、小学校では楽しそうに学校に通っていたにもかかわらず、中学校で不登校になり非行・犯罪の道に走ってしまう。中学校に行かなくなった理由は、勉強についていくことが出来ず、悪い友人たちと遊ぶのが楽しかったからだと言っている。その後彼は「不法滞在者」として現在も収容されている(書籍紹介文より)

もし彼が、優しく支援をしてくれる人や団体に出会えていたら、彼の人生は大きく変わっていたかもしれません。

これからも、日本語がまったくわからず、親の都合で栃木県にやってくる子どもたちはたくさんいると思います。そんな子どもたちに彼のような苦しさは味わってほしくありません。HANDSプロジェクトの支援活動が、ひとりでも多くの外国人の子どもたちに届くことを強く願っています。微力ながら下野新聞社も少しでもお役にたてるよう努力していきたいと思っています。

頑張れHANDSプロジェクト!!

HANDS Jr.の活動から見える学生の主体性と行動力

宇都宮大学国際学部特任助教 佐々木 優香

はじめに

筆者は宇都宮大学着任前からHANDSとして活動する宇大生との関わりがあった。というのも、筆者は一般財団法人日伯経済文化協会(ANBEC)の一員として、主に茨城県常総市を中心にブラジル人親子支援に携わってきた。そこで宇大生と関わりをもつことができた。支援を必要とする子どもがいると聞けば、遠方から駆けつけてくれる彼らのフットワークの軽さと、支援に対する熱意に礼賛した。県境を跨ぐ活動範囲の拡大からは、茨城県と栃木県のような近隣地域での各種支援がもはや個別の限定された活動に留まらない現状が垣間見える。以下では、HANDS Jr.のメンバーとして活躍する数名の学生へのインタビューから見出される、活動を通して培われた学生の主体性と、HANDS Jr.としての活動の重要性について記す。

茨城県常総市における学習支援の概要と隣接県との関わり

まずは、上述の茨城県での支援活動について少し触れたい。法務省在留外国人統計によれば、茨城県内では2019年6月末現在、中国(13,183)、フィリピン(10,158)、ベトナム(8,540)、ブラジル(5,914)、タイ(4,852)の国籍保持者が多く居住している。中でも、ANBECはブラジル人を支援の対象としている。ブラジル国籍に着目すると、その分布状況としては、同国籍保持者の約35%にあたる2千人以上が常総市に集住していることが分かる。

ANBECは滞日ブラジル人を対象とし、「教育プロジェクト」、「職育プロジェクト」、「社会プロジェクト」の活動を広く展開してきた。そのうち「教育プロジェクト」の一環で、先述のブラジル人集住地域である常総市を拠点に2015年から公立小中学校在籍ブラジル人児童生徒への学習支援を毎週土曜日に継続的に行っている。この学習支援教室の特徴として、大学生が中心となり学習支援ボランティアの活動を支えている点があげられる。様々なルートを通じ、この活動を知った宇大生が実際に現場に足を運び、子どもたちの支援に当たってくれたのである。